

【実践報告】

教育実習（教育実習Ⅰ 幼稚園）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 准教授 上 村 加 奈

1 はじめに

本学において幼稚園教諭一種免許状取得を希望する学生は、教育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを段階的に学修する。教育実習Ⅰの履修前に、選択科目である教育実習Ⅶをほとんどの学生が履修するため4段階の学びとなっている。教育実習Ⅰは学内での学修を基本とし、幼児教育の基本にもとづく実践力を養成することを目的としている。続く幼稚園における実習となる教育実習Ⅱを見据えている。そこで、授業のねらいを教育実習Ⅱに臨む前に、教育実践力を培うとしている。

培う力として、①保育の基礎理解・子ども理解②保育指導案を立案する力③教材研究をする力④保育を展開する力（子どもの様子を観察し、実態把握をする力・子どもの実態に応じて働きかける力・集団と個人に対応する力）⑤基礎技能の5点を挙げている。

2 実施のスケジュール

項 目	授業回	主 な 内 容
全体指導 指導案の書き方	第1回	オリエンテーション（教育実習Ⅰの位置づけ 授業のねらいと概要・実習資格）
	第2回	指導案立案の要点 模擬保育Ⅰ指導案の内容（6月の指導計画から考える）指導案検討
	第3回	指導案の立案と書き方（プレゼンテーションによる話題提供 意見交流）指導案検討
グループ別模擬保育	第4～8回	模擬保育Ⅰ（対象年齢 3・4・5歳児） 指導案検討（5回）
全体指導 中間まとめ	第9回	模擬保育Ⅰのまとめ 模擬保育Ⅱに向けて（年間指導計画から考える）指導案検討 教育実習Ⅱに向けて
グループ別模擬保育	第10～14回	模擬保育Ⅱ（対象年齢 3・4・5歳児） 指導案検討（3回）
全体指導 学修のまとめ	第15回	教育実習Ⅰのまとめ 教育実習Ⅱに向けて
保育実践		幼稚園における保育実践

3 活動の概要

授業全体を3部構成にして、指導案の立案と書き方、模擬保育Ⅰ、模擬保育Ⅱとした。教育実習Ⅱを見据えて、実習資格を意識して学修姿勢向上に取り組むように指導した。

今年度から新規の取り組みとして、幼稚園において子どもの前に立って保育実践（手遊び、弾き歌い、絵本の読み聞かせ）をすることを課した。

1) 授業の概要

①指導案の立案と書き方の学修

これまでの授業で得た知識を基に、指導案の立案と書き方の要点を学修する。2年前期までの学修を基に、子どもにとっての遊びの意味を考えながら指導案を作成する。指導案の役割や書き方は幼児教育課程論や保育課程論の授業の学びと関連させて、段階的に学修できるようにした。

学生の代表者が、立案した指導案をプレゼンテーションして質疑応答や意見交流をすることで、具体的な事項の理解を図った。書き方や保育の流れ（導入・展開・まとめ）の理解を促すことに留まらず、遊びを通して行う保育の本質的な部分を理解するように働きかけた。

②模擬保育Ⅰ

教育実習Ⅱの実施時期である6月の指導計画を基に指導案を立案した学生が保育者役となり、他の学生が子ども役となって模擬保育を行なう。模擬保育の後に協議会をもち、実践の振り返りを行った。保育者役と子ども役の両者の視点で意見交流した。

昨年度導入した評価票を修正し、身につけることが望まれる力を基本的スキルと応用的スキルで示した。基本的スキルを①構成力②応答性③表現技術に分け、各項目3～4の視点を示して目指す力を提示した。

模擬保育Ⅰが終了した時点で、教育実習Ⅱに向けての意識づけと模擬保育Ⅰのまとめを行った。本授業が教育実習Ⅱに繋がっていることを意識できるように、教育実習Ⅱの概要と今後の取り組みを提示した。教育実習Ⅱを見据えて、模擬保育Ⅰでの学びの確認と疑問点の洗い出し、模擬保育Ⅱに向けた取り組みを考えた。

③幼稚園での保育実践

模擬保育で子ども役になる力を培うこと、遊びの指導を体験的に学ぶことを目的にして今年度から開始した。実施は、本学附属幼稚園において13時から1時間半の時間帯で、手遊びや弾き歌い、絵本の読み聞かせなどを行う。実践内容は、学生が選択し季節や年齢に合ったもの考えることとした。模擬保育Ⅰ終了までに1人1回の実践ができるように計画した。

④模擬保育Ⅱ

模擬保育Ⅱでは、模擬保育Ⅰの学びを踏まえ年間指導計画を基に、実践する月を決めて指導案立案と模擬保育に取り組む。授業後には、学びを振り返って改訂指導案を作成することとした。

2) 保育実践の振り返り集計結果

附属幼稚園での保育実践の振り返りを集計した。結果は次に示す通りである。（回答率96%）

①実践内容（複数回答可）

実践内容	人数
手あそび	38 (79%)
弾き歌い	12 (25%)
絵本の読み聞かせ	38 (79%)

手あそびのみを行った学生は1名で、弾き歌いや絵本の読み聞かせの前に手あそびを行っている。弾き歌いの曲は、幼稚園で歌っているものの情報を得て学生に伝えていた。自由選択にすると弾き歌いが少ないのは難易度か自信のなさが要因であると思われる。

②実践を通した子どもに対する気づき（一部抜粋）

記述内容から「子ども理解」・「学生の内省や意欲向上」に分けて掲載する。

《子ども理解》

- ・手遊びと弾き歌いの両方で、「まつぼっくり」をしたので、子どもたちが、途中であきてしまうかもしれないと思って、少し不安だったけど、思っていたよりも、あきている様子が見られなかったので、大学生と子どもでは感じ方が違うのだと感じました。
- ・手遊びの時は元気に反応してくれて、絵本を読む時はほとんど喋らずに聞いてくれていて、とてもメリハリがしっかりしていると感じました。手遊びの「とんとんとんひげじいさん」を徐々にスピードを上げてやろうと思っていたら、「新幹線の速度がいい」など案をどんどん出してくれて一緒に楽しんでくれていることが感じられたと思いました。
- ・子どもたちからやりたい手遊びを言ってくれたことから、好奇心が高いと思った。また、問いかけに対してたくさんの答えを出す様子がみられ、沈黙になる時間が無かった。その反面、意見を言い続ける子どももいた。また、参加せず見ている子どもの姿も見られた。
- ・ほとんどの子どもは絵本に興味を持ってくれ真剣に見てくれて嬉しかった。絵本を読んでいる際、絵本に載る小さな絵にまで気づいていた。私たちが、あまり気にしない部分や気づきにくい部分でも子どもには、すぐに目に入り、大人に比べて見る範囲が広いと感じた。弾き歌いでは『こぎつね』を弾き、子供達は元々よく歌ってくれた。絵本を聞く時の姿と歌う時ではまた違い、皆、堂々と歌っていた。

実際に子どもに接したことにより、気づきや発見があったことが分かる。予想を超える姿に対する驚きや子ども独特のとらえ方を理解、個別理解の必要性などを学んでいる。

《学生の内省や意欲向上》

- ・行く前は不安と緊張で嫌な気持ちがありました。でも実際に実践させてもらうととても楽しくできました。子どもたちはどんなことでも興味を示してくれると感じました。何をしてくれるんだろうとワクワクしていました。実際にしてみるとすごく楽しんでくれていて、子どもってこんなにも楽しんでくれるのだと驚き。私自身も楽しく実践をさせていただくことができました。
- ・手あそびをしてから絵本の読み聞かせをしたので、椅子に座ってから読み聞かせをしないと、後ろの子どもたちには見えないと感じた。手あそびはのねずみをして、本に載っていたリズムと少し違ったので、必要に応じて変えていく必要があると感じた。
- ・手遊びをした時、じゃんけんをしたら子どもが何を出したか見せに来てしまい、落ち着きがなくなってしまったので、じゃんけんをしたのは失敗だったように感じた。絵本は、読むことに少し必死になり、あまり子どもの様子を見ながら読むことが出来なかった。
- ・弾き歌いで「こぎつね」をしたが子どもたちは、3番を知らなくて実習生だけ歌う形になってしまったが、帰りの会後に、「3番知らなかったから覚えるね!」と声をかけてくれて、知らないからやらないではなく、知らないから覚えよう、やってみよう繋がる前向きな姿勢を感じることが出来た。3番まで歌ったことに後悔したが失敗では無かったのかなと感じた。また多くの子どもが楽しそうに取り組んでいたが、表情や声色から実習生の緊張が伝わっているのではないのかと考えた。
- ・子どもたちは幼稚園だけでなくテレビなどを見て、多くの手遊びを知っているため、私も手遊びのレパートリーを増やすことが必要だと考えた。
絵本の読み聞かせの時に様々な反応をしており、子どもの想像力は思っていた以上だったため、さらに表情豊かに絵本の読み聞かせができるようにしようと考えた。

子どもとの関わりを通して、課題を見つけたり意欲が向上したりしている様子がうかがえる。見つけた課題について、具体的に質問している。回答は次のとおりである。

③困ったこと、課題であると感じたこと（一部抜粋）

- ・時間が余ってしまい、何か他のことをしていいよと時間をいただいたのですが、生かせませんでした。自分が持っている手遊びの数を増やしておくべきでした。
- ・子どもの「もっと」という声に、どのくらいまで答えていいのかわからなくて、困りました。
- ・やきいもグーチャーパーでじゃんけんをしたら思っていた以上に盛り上がってしまいその盛り上がりからどのように次の活動に移したらいいのか分からず困った。また、盛り上がって実習生の周りに来る子どもや子ども同士で違うことに楽しくなった子どもにどのように声をかけたらいいのか分からず困った。
- ・何の絵本を読むかわかった時、子どもたちが一斉に「見たことある」などの絵本への思いを言ったり、それに反応した後どこで区切ればわからなくなったところです。
- ・絵本を読む際、前に出できる子どもがいたため、後ろに座っていた子どもが十分に絵を見る事ができなかった。
- ・ピアノを弾くときに、自分の後ろにいる子どもを見ることができなかったことと、手遊びなどの説明をするときに、もっとわかりやすく伝えられるように工夫することが課題だと思いました。
- ・本のめくり方が良くなかったため、どの本でも上手くめくれるようにする必要があると感じた。緊張して焦

りすぎると余計に思い通りにいかないのが、子どもの前に立つことをもっと経験する必要だと感じた。手遊びは3～5歳の子どもがいたので、動きやスピードに気をつけてみんなができているのか確認することが難しかった。

目の配り方や応答性など、子どもの前で実践しなければ実感を伴った気づきにならない事項が課題として挙がっている。

4 成果と課題

今年度、新たに取り組んだ内容に関してその成果と課題をまとめる。

①指導案検討プレゼンテーションでの学び

第3講に、プレゼンテーション形式の指導案検討を実施している。これは、遊び指導を具体的に理解することをねらっている。学生からの質疑や意見も数多くでて闊達な協議会になった。指導案作成の経験が少ない段階の学生たちではあるが、教員から本活動が子どもにとってどのような意味があるのか、どんな育ちを期待しているのか等、保育の本質に関わることに繋げて考えられるような働きかけをした。全ての授業を終えて考えると、学びの深まりの要因は、ここでの葛藤がバネになっていた。一斉授業となるため、学生の様子に応じながら内容の掘り下げ方を考える必要はある。

②幼稚園での保育実践を体験

模擬保育では、子ども役になって保育を体験する。これまでの学修や経験、教育実習Ⅶでの学びをもとに子ども役を演じる。子ども役をすることにより子どもの気持ちを理解して、指導案立案時に子どもの姿を予想することに繋げていく。子どもとの接触体験が少ない学生にとって、3～5歳の子どもになりきることは容易ではない。予想される子どもの姿が描きにくいのは当然のことである。子ども理解と援助のしかたの理解を目的に、教育実習Ⅱに向けた段階的な経験として保育実践を課した。学生の学びの実態は先に示した通りである。

保育実践の準備をすることで、子どもの前に立つことを強く意識するようになり、模擬保育への取り組みにも真剣さが増した。子どもと関わることで、喜びを感じたり自らが課題に気づいたりした。これにより、模擬保育Ⅰのまとめにおいても、子ども理解の視点と援助や環境の視点、両面からの意見が出され、具体的な振りかえりを行っている実態がみえた。

今回の保育実践では、1クラス1名の配属として自主的に取り組む環境づくりをした。また預かり保育場面の体験も盛り込み、次年度の実習を意識する内容とした。場面による子どもの様子の違いや保育者の配慮に目を向ける機会となった。

③評価票

保育者としてのスキルを構造化した評価票を用いた。5件法にして各段階に学生が自己を振りかえりやすい表現の評価基準を設定した。今年度の授業で用いてみて、模擬保育を客観的に振りかえることができる。3年次4年次の実習を通して成長する幼児教育コースの学びのスタイルの中で、学生が自己評価しやすく次への課題を設定しやすい構成になっていると言える。来年度の実習Ⅱ・Ⅲでも活用し、成果と改善を検討したい。